

我が青春時代のセンター

中筋 章人

はじめに

最近の「SABO」の随想は、大変読み応えがあります。渡辺さんのすさまじい体験談、廣住さんや瀬尾さんの含蓄のある示唆に富んだお話、そして土井さんの崇高かつ機知あふれるお話などです。

そんな中で、なぜ若輩者の私が。いくらセンターの某編集委員に借りがあるからと言って「まるで無謀というものではないでしょうか」と懇願しましたが、「まあ、誰もまじめに読んでないから」という言葉に押し切られて書くはめになりました。

そこで、私が青年であった頃の楽しい思い出を紹介してみたいと思います。

黎明期のビックプロジェクトその1

—仁淀川土砂災害対策委員会—

私は、昭和46年に現在の会社に入社するとともに、全国の災害調査（といってもその多くが極めて単純な崩壊地調査）に従事していました。

入社して3年たった昭和50年7月に砂防・地すべり技術センターが出来ましたが、ほぼ同時期の8月に高知県の仁淀川で台風5号による死者72名という激甚災害が発生しました。そこで、四国地建（当時の吉野川砂防工事事務所）の委託によるセンター最初の委員会「仁淀川流域土砂害調査委員会」が発足しました。手元にある報告書の概要版をみますと、武居有恒委員長をはじめ、奥田節夫・栃木省二・大平英輔各教授などからなる22名の委員、近森専門官をはじめとする14名の幹事、森係長（現建設省砂防部長）をはじめとする6名のワーキンググループという大所帯でした。ずいぶんはりきってすばらしいメンバーを集めたのに、これを運営するのが、発足まもないセンターで谷勲さんと榎本政雄さんのわずか2名でした。私も全面的に調査資料作成に従事しましたが、51年3月までというわずか半年の工期内で、仁淀川流域約1000km²を

対象に現地調査から空中縦横断測量による土砂収支、土石流危険度判定、降雨解析と危険区域の設定というフルメニューをこなしました。

厳しい仕事が続いたため、もう調査会社（当時はコンサルと呼べるものではなかった）もセンターとのつきあひもこりごりだと何度も思いました。しかし、次に述べるメラピ火山の楽しい思い出のおかげで今日までなんとか続けてこれました。センター最初の大仕事が信用をおとさずに無事に達成された陰には委員長をはじめ委員の先生方、幹事の方々、そしてセンターと我々事務局が一体となり、「センターを無事船出させよう」という大きな情熱があったことを忘れないでほしいと思います。

黎明期のビックプロジェクトその2

—メラピ火山マスタープラン—

昭和52年にセンターがまだ国内の業務を十分に生産できる体制がととのっていないところにJICAから「インドネシア国メラピ火山砂防基本計画策定調査」という大型プロジェクトが舞い込みました。

ちょうど、鈴木宏さんと土屋昌平さんがセンターへ入られて担当されました。しかしお二人とも海外プロジェクトはまるっきり初体験ということで民間コンサルタント5社から10名以上の精鋭(?)を集めてスタートしました。現地のジョクジャカルタでは、コタバルのゲストハウスを借り切り、常時10数名が約3ヶ月間滞在しました。2年目の昭和53年には、黒川さんが新人職員としてやってこられ、ほかにも人数が増えたのもう1軒借りるようになりました。

メラピ火山では、1930年に火砕流によって1400人の死者が出たのをはじめ、1961年、1969年と連続して大災害が発生していました。



インドネシア共和国メラビ火山の熱雲（マウンパナス）。
1984年6月15日インドネシア火山砂防センター職員撮影。

私の担当は、基本土砂量の中でも計画生産土砂量の算定でしたので、ラドゥ（大規模火砕流）、アワンパナス（熱雲）、ラハール（火山泥流）、バンジール（洪水流）などといった堆積物の年代別の分布状況を調べに、連日山へ入っておりました。その時カウンターパートとして調査に同行したのが、地質屋のスマルトノ（前バリ治水砂防事務所長）、アグス（前砂防技術センター所長）、スパルカ（現砂防技術センター所長）などの若くて優秀なインシニョールたちでした。またジャカルタの浜守さんや渡辺さん、ジョクジャカルタの三島さんなど日本人専門家にも大変お世話になりました。

現地では、このように楽しくやっていたのですが、大変だったのは、監理委員会の先生方がおいでになった時です。武居先生、栃木先生はじめ松林さん西村さんなど壮々たるメンバーが入れかわり立ちかわりおいでになり、次から次へと思いつきのような注文が出されるのです。これを無事のりきるのがいかに大変だったか……今思い出しても冷や汗がでるところです。

「なんだかんだとやりながらも、一応マスターブ

ランを作成し、最後にインドネシアに「火山砂防技術センター」が必要であるということを提言しました。その後この提言が実現し、日本とインドネシアの砂防のかけはしとして昭和57年から15年もセンタープロジェクトが続いたことは大変すばらしいことだと思っております。

三羽烏とサンド会

昭和51年に松村さんが、53年に黒川さんが、54年に安養寺さんがセンタープロパーとして採用され、ここに若手三羽烏が勢ぞろいしました。彼らが砂防の実務を6～7年経験した昭和59年頃に自然発生的に砂防が抱える諸問題に対して勉強会をやるうということになりました。ついては各コンサルの元気のいい若手にも声をかけて、常時10～20名からなる「サンド会」が誕生しました。サンド会の名の由来はセンターが砂土原町にあったことと、当時午前のみ勤務の第三土曜日の午後に来ることにしたためです。

ここでは毎月松村会長、中筋懇親会長のコンビで午後2時から誰かが話題提供をし、みんなで「砂

防の将来は」「砂防コンサルとは」「砂防のいいかげんさ」などについて議論を重ねていました。とくに土砂水理の専門家である宮本さん（現筑波大）が入られた昭和61年には、みんなで日光の現場で一泊し、平均粒径などいかに水理屋さんはいいかげんかについて議論したことがなつかしく思い出されます。宮本さんに議論で負けると、「女もくどけなくて一人前の技術屋か」といって居直ったものですが、今年ついにこのセリフが言えなくなってしまうました。若く才長けた見目麗しき女性をくどきおとされたことは私にとって何かの間違いと今でも信じております。

サンド会の成果は、昭和63年4月に鹿島出版から出された「土砂災害調査マニュアル」として結実しました。この勉強会の精神は、榎木さんを中心とする第二世代（30代の若手）に引きつがれ、「砂遊会」として活発に活動されております。

一方サンド会は、平成3年からゴルフ場のサンド会へと変身し、毎年2～3回のペースで親睦を深め、今年で20回を数えました。センターの三羽鳥も、いつのまにかもう50歳前後となり、次長さんや課長さんとして業務をとりしきっておられます。

おわりに

先に書いた楽しい話ばかりではなく、私にはセンターと大げんかをして1年間センターの敷居をまたげなかった時期もあったのですが、もう忘れしました。それより、いつもセンターの皆さんが本省対応や災害対応に奔走されている様子を見ている

と、正直なところ頭が下がる思いがしております。しかし、せっかくだから最後に現在のセンターについて一言申し上げて終わりたいと思います。解説を加えると長くなるので箇条書きでお許してください。

センターの問題点は、次の2つに要約されるでしょう。

- 競争の原理が働かないことからくる業務に対する真剣さが欠如していること。
- 業務量が多いため外注に依存することが多く、技術の空洞化がおりつつあること。

センターの最大の功績は次の2つでしょうか。

- 出向制度により多くの砂防技術者を育て、コンサルタントの技術力の底上げに貢献したこと。
 - 多くの業務をこなす中で砂防に関するあらゆる検討資料が蓄積され、一大データベースストック機関となりつつあること。
- センターの今後に期待すること
- シンクタンク機能の育実：研究所をはじめとし高度な技術力と理論武装に期待します。
 - ライブラリ機能の育実：データ公開と情報サービスに期待します。
 - 現場技術の評価：皆さんもっとゆっくり現場を見ましょう。

（国際航業株式会社 技術センター技師長）